

# 性的被害とトラウマ

## —関西コミュニティ調査の統計分析—

応用社会学科 石川義之

抄録：筆者たちは、1999年～2000年に関西圏に在住の女性を対象に無作為抽出法による性的被害の実態調査を実施した。この調査データの統計分析によって有意であることが確認された諸変数間の関係は次のようであった。①性的被害と5つのデモグラフィック要因(回答者の現在の年齢、現在の配偶者との同居状況、現在の母親との同居状況、回答者が育った地域、回答者の現在の雇用形態)との関係。②性的被害と心理的損傷(=客観的トラウマ変数)との関係。③性的被害の頻度、加害者のタイプ、被害継続期間と主観的トラウマ変数との関係。④性的被害とPTSD症状(=客観的トラウマ変数)との関係。⑤心理的損傷とPTSD症状との関係。⑥性的被害経験と「否定的」生活経験(=客観的トラウマ変数)との関係。⑦心理的損傷と「否定的」生活経験との関係。⑧PTSD症状と「否定的」生活経験との関係。以上の諸関係から性的被害のもたらす影響の流れを抽出すると、その影響の流れのメイン・ルートは、性的被害→心理的損傷→PTSD症状→「否定的」生活経験、と定式化できる。この連関から、PTSDの発症や「否定的」生活の発生を防止するためには、より前の段階での専門家等による治療的・福祉的介入が必要であることが示唆された。

索引語：性的被害、性的虐待、近親姦、心的外傷、外傷後ストレス障害

筆者は、大阪の女性ライフサイクル研究所(村本邦子所長)などと協力して、1999年から2000年にかけて、関西圏に在住する女性を対象に、無作為抽出法(random sampling)による性的被害の実態調査を実施した。調査は、都市部(大阪市)調査と農村部(郡部)調査とに分けて行い、いずれにおいても自計式調査票法による郵送調査(=アンケート調査)と他計式調査票法による個別面接調査(=インタビュー調査)の2種を実施した。

うち都市部調査については既に報告書やいくつかの論文において分析結果を紹介しているが[石川 2000, 石川ほか 2001, 石川 2001, 村本 2001, 石川 2002], 本論文では、都市部・農村部の両アンケート調査の合併データについて、性的被害のもたらすトラウマに焦点を置いて、その統計分析結果のエッセンスを報告する\*。

\*全般的でより詳細な分析については、下記の文献を参照されたい。

石川義之・村本邦子・新理恵・窪田容子・西順子・前田真比子・前村よう子・横野まゆみ, 2002, 『性的被害の現在—関西コミュニティ調査報告—』(2001年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成成果報告書)女性のトラウマを考える会。

石川義之・村本邦子・新理恵・窪田容子・西順子・前田真比子・前村よう子・横野まゆみ, 2002, 『性的被害女性のライフコース(インタビュー調査分析)—関西コミュニティ調査報告(II)—』(2001年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成成果報告書)女性のトラウマを考える会。

### 1. 調査実施の概要

#### 1-1. 調査対象者(調査票発送数)：

都市部(大阪市24区)在住の18～54歳の女性(3,012人)。

農村部(大阪府, 京都府, 兵庫県, 奈良県, 和歌山県の郡部10町村)在住の20～54歳の女性(1,893人)。

1-2. 標本抽出法：住民基本台帳（都市部）及び選挙人名簿（農村部）に基づく無作為抽出法（系統抽出法）。

1-3. 調査方法：調査票法（自計式調査票法）による郵送調査法。

1-4. 調査期間：都市部調査；1999年5月17日～6月25日。

農村部調査；2000年6月19日～9月4日。

1-5. 有効回答数（有効回答率）：都市部調査；506件（16.799%）。

農村部調査；305件（16.112%）。

合 計；811件（16.534%）。

## 2. 性的被害の経験率と関連要因

### 2-1. 被害種別経験率 [表1]

表1に示される15種の性的被害の経験の有無については、見られるとおり、「被害経験がある」が最も多いのは「お尻などへの接触」で58.4%，以下、「衣服の上からの性器等への接触」43.7%，「露出行為」40.4%，「言葉での嫌がらせ等」34.8%とつづく。「性交未遂」は5.1%，「性交」は3.6%であった。

表1 被害種目別の性的被害経験の有無—降順— 単位：度数(%)

| 被害種目      | ある        | ない        | 合計         | 順位 |
|-----------|-----------|-----------|------------|----|
| お尻などへの接触  | 467(58.4) | 333(41.6) | 800(100.0) | 1  |
| 衣服の上からの接触 | 351(43.7) | 452(56.3) | 803(100.0) | 2  |
| 露 出 行 為   | 323(40.4) | 477(59.6) | 800(100.0) | 3  |
| 言 葉 の 被 害 | 280(34.8) | 524(65.2) | 804(100.0) | 4  |
| つきまとい     | 180(22.4) | 622(77.6) | 802(100.0) | 5  |
| キ         | 170(21.2) | 633(78.8) | 803(100.0) | 6  |
| の         | 149(18.6) | 653(81.4) | 802(100.0) | 7  |
| 直 接 接 触   | 134(16.7) | 667(83.3) | 801(100.0) | 8  |
| 回 想 不 能   | 104(15.1) | 584(84.9) | 688(100.0) | 9  |
| 接 触 強 制   | 74( 9.2)  | 728(90.8) | 802(100.0) | 10 |
| 指・物の挿入    | 65( 8.1)  | 735(91.9) | 800(100.0) | 11 |
| その他の被害    | 54( 8.0)  | 617(92.0) | 671(100.0) | 12 |
| オーラルセックス  | 47( 5.9)  | 750(94.1) | 797(100.0) | 13 |
| 性 交 未 遂   | 41( 5.1)  | 759(94.9) | 800(100.0) | 14 |
| 性 交 完 遂   | 29( 3.6)  | 774(96.4) | 803(100.0) | 15 |

### 2-2. 「接触的」「非接触的」別経験率 [表2]

今回の調査では、「被害」と「非被害」との間のグレーゾーンを排除し、「被害」の実態をより鮮明に浮かび上がらせるために、「接触的」被害にウエイトを置いたが、「言葉での嫌がらせ等」「覗き」「露出行為」「つきまとい」の4項目は「非接触的」被害に属する。15種の被害中「その他の被害」と「回想不能の被害」という接触・非接触分別不能の被害を除く12種の被害について、被害経験者の接触・非接触・両方別の内訳比を見ると、「非接触的被害のみあり」10.7%，「接触的被害のみあり」19.5%，「両方の被害あり」69.9%で、接触・非接触両方の被害を経験した者が過半に達する\*。

\*この内訳比の算出に当たっては、被害経験を報告した639名から「その他の被害」・「回想不能の被害」という接触・非接触分別不能の被害のみを受けた2名を除外した637人について、上記3カテゴリーへのふるい分けが行われた。そして、たとえば接触的被害と回想不能の被害とを受けている場合は「接触的被害のみあり」としてカウントした。

表2 接触・非接触別被害の有無

|                | 度 数 | パーセント | 有効パーセント | 累積パーセント |
|----------------|-----|-------|---------|---------|
| 有 効 非接触的被害のみあり | 68  | 8.4   | 10.7    | 10.7    |
| 接触的被害のみあり      | 124 | 15.3  | 19.5    | 30.1    |
| 両方の被害あり        | 445 | 54.9  | 69.9    | 100.0   |
| 合 計            | 637 | 78.5  | 100.0   |         |
| 欠損値 システム欠損値    | 174 | 21.5  |         |         |
| 合 計            | 811 | 100.0 |         |         |

## 2-3. 全体的経験率 [表3]

上記15種の性的被害のどれか1つでも受けたことのある者の比率(=全体的経験率)は79.0%であった。この数値は、東京都在住の20代～50代の女性を対象にした小西聖子たちの無作為標本調査(1998年)での83.7%[日本性教育協会 1999]、日本性教育協会による学生調査(1999年11月～2000年1月)における大学生女子の被害化率85%[日本性教育協会 2000]という数値と近似する。わが国の最近の調査が把握した女性の性的被害経験率はおよそ8割ということになる。ただし、調査被害項目を増やせば当然比率はより上昇するであろう。

表3 被害経験の有無

|                          | 度 数 | パーセント | 有効パーセント | 累積パーセント |
|--------------------------|-----|-------|---------|---------|
| 有 効 被害経験が1つもない           | 170 | 21.0  | 21.0    | 21.0    |
| 被害経験が1つ以上ある              | 639 | 78.8  | 79.0    | 100.0   |
| 合 計                      | 809 | 99.8  | 100.0   |         |
| 欠損値 システム欠損値 <sup>a</sup> | 2   | .2    |         |         |
| 合 計                      | 811 | 100.0 |         |         |

a. 脚注：15被害項目全てに無回答者の数

## 2-4. 「被害経験の有無」と「デモグラフィック要因」との関係——クロス集計とカイ2乗検定・直接確率検定—— [表4]

15種の性的被害のどれか1つでも受けたことが「ある」か、どれも受けたことが「ない」という「被害経験の有無」と「デモグラフィック要因」との関係についてのクロス集計に伴う統計的検定の結果は表4のようにまとめられる。

このクロス集計結果から得られた知見は、集計表の統計的検定結果が有意になったものに限れば、以下のようになる。

- (1) 「回答者の現在の年齢」と「被害経験の有無」との関係：被害経験が「ある」は、年齢段階が若くなるほどその比率が高まっている。このことは、比較的に年齢の高い層が、性的被害のリスク年齢にあった時代は、性的被害の発生率が低かったことを意味しており、時代が現在に近づくにつれて、性的被害の発生率が高まっていたことを表している。
- (2) 「現在の配偶者との同居状況」と「被害経験の有無」との関係：「現在同居している配偶者がいない」者において被害経験率が高く、「現在同居している配偶者がいる」者において被害経験率が低い。このことは、過去において性的被害を経験したことが、現在において「同居配偶者がいない」状況をつくり出す上で有意に作用したことを意味している。
- (3) 「現在の母親との同居状況」と「被害経験の有無」との関係：「現在同居している母親がいる」者において被害経験率が高く、「現在同居している母親がいない」者において被害経験率が低い。このことによって、性的被害経験によってもたらされた不安・恐怖・無力感などの心理的損傷が、同性の親である母親との同居による癒着を存続させているという事態を想定できる。
- (4) 「回答者が育った地域＝環境」と「被害経験の有無」との関係：被害経験率は、「団地・住宅地域」で最も高く、逆に、「農・漁・山村地域」で最も低く、「商・工業地域」はその中間となっ

表4 「被害経験の有無」と「デモグラフィック要因」との関係についての統計的検定結果のまとめ

| デモグラフィック要因           | $\chi^2$ 検定 |             | 有意差判定 |
|----------------------|-------------|-------------|-------|
|                      | 直接確率検定      |             |       |
| 回答者の現在の年齢 (8分割)      | P=0.000     | p<.01       | **    |
| 回答者の現在の年齢 (3分割)      | P=0.000     | p<.01       | **    |
| 子ども時代を過ごした主な場所 (6分割) | P=0.079     | p>.05       |       |
| 子ども時代の主な養育者 (5組合せ)   | P=0.413     | p>.05       |       |
| 子ども時代の主な養育者 (3組合せ)   | P=0.151     | p>.05       |       |
| 配偶者との同居状況            | P=0.006     | p<.01       | **    |
| 子どもとの同居状況            | P=0.106     | p>.05       |       |
| 父親との同居状況             | P=0.068     | p>.05 p<.10 |       |
| 母親との同居状況             | P=0.042     | p<.05       | *     |
| 同居親族の有無              | P=0.599     | p>.05       |       |
| 親との同居状況              | P=0.052     | p>.05 p<.10 |       |
| 育った地域 (8分割)          | P=0.001     | p<.01       | **    |
| 育った地域 (3分割)          | P=0.000     | p<.01       | **    |
| 育った家庭の経済状況 (5分割)     | P=0.354     | p>.05       |       |
| [Fisherの直接法]         | P=0.306     | p>.05       |       |
| 育った家庭の経済状況 (3分割)     | P=0.112     | p>.05       |       |
| [Fisherの直接法]         | P=0.082     | p>.05 p<.10 |       |
| 現在の家庭の経済状況 (5分割)     | P=0.812     | p>.05       |       |
| [Fisherの直接法]         | P=0.848     | p>.05       |       |
| 現在の家庭の経済状況 (3分割)     | P=0.505     | p>.05       |       |
| 回答者の現在の職業 (12分割)     | P=0.228     | p>.05       |       |
| 回答者の現在の職業 (4分割)      | P=0.402     | p>.05       |       |
| 勤め人である場合の雇用形態        | P=0.030     | p<.05       | *     |
| 配偶者・パートナーの職業 (12分割)  | P=0.222     | p>.05       |       |
| 配偶者・パートナーの職業 (5分割)   | P=0.555     | p>.05       |       |

\*\* p&lt;.01 \* p&lt;.05

ている。このことは、「農・漁・山村地域」に残る強いコミュニティの監視機能が、性的被害への外的抑止力として機能し続けている反面、「団地・住宅地域」におけるコミュニティ監視機能の不全はその外的抑止力を低下させており、そして、「商・工業地域」はコミュニティ監視機能とそれに基づく外的抑止力の点で両地域の中間にあることを示していよう。

- (5) 回答者が現在勤め人である場合の「雇用形態」と「被害経験の有無」との関係：回答者の現在の雇用形態が「非常勤」の場合において被害経験率が高く、「常勤」である場合において被害経験率が低い。このことは、性的被害を経験した女性たちは、そのことで苦悩する結果、「常勤」を望む場合でも、「非常勤」の職しか得られなかった、ということを示しているようか（このように言うことは、「非常勤」の職が「常勤」の職よりも価値的に低いという含意を持たない）。

### 3. 回答者自身の現在の状態 (=心理的損傷状態)

#### 3-1. 回答者自身の現在の状態の調査項目 [表5]

回答者自身の現在の心理的状态を把握するために、次の12項目について、「そう思う～そう思わない」の4件法で回答を求めた。なお、括弧内は、「思う」「思わない」の2分法でみた場合の「思う」の%である。

「いつも悲しい気分である」(12.6), 「男性が信用できない」(16.8), 「いつも怒りの気分に満たされている」(12.2), 「漠然とした不安や恐れがある」(29.9), 「自分が無力だと感じる」(35.8), 「他人を思いどおりに動かせたらと思う」(21.5), 「何かにつけ自分を責めることが多い」(31.1),

「いつも自分を恥じている」(16.0), 「自分が他の人びとは違う人間であるという感覚がある」(17.4), 「セックスに対して嫌悪感がある」(14.4), 「性的なことを口にすることに抵抗がある」(36.7), 「性的な場面に会おうと混乱する」(18.7)。

表5 回答者自身の現在の状態(2分法)－降順－

単位：%

| 現在の状態             | 思う   | 思わない | 現在の状態        | 思う   | 思わない |
|-------------------|------|------|--------------|------|------|
| K性的なことを口にすることへの抵抗 | 36.7 | 63.3 | I異 質 感       | 17.4 | 82.6 |
| E無 力 感            | 35.8 | 64.2 | B男 性 不 信     | 16.8 | 83.2 |
| G自 分 を 責 め る      | 31.1 | 68.9 | H自 分 を 恥 じ る | 16.0 | 84.0 |
| D不 安 や 恐 れ        | 29.9 | 70.1 | Jセックスに対する嫌悪感 | 14.4 | 85.6 |
| F他人を思いどおりに動かしたい   | 21.5 | 78.5 | A悲 しい 気 分    | 12.6 | 87.4 |
| L性的場面に会おうと混乱      | 18.7 | 81.3 | C怒 り の 気 分   | 12.2 | 87.8 |

## 3-2. 性的被害経験が「現在の状態」に及ぼす影響

## 3-2-1. T検定－性的被害経験の有・無間での「現在の状態」の差の検定－[表6]

「現在の状態」の12項目を尺度化し、項目ごとの得点及び合計得点を算出した上で、前項の15種の性的被害経験が1つでも「ある」者と全く「ない」者との間で、それらの得点の平均値に差があるかどうかを見るためのT検定を行った。T検定の結果、「ある」者と「ない」者との間において「現在の状態」の12項目全て、及び合計得点で示される「現在の状態」の全体について有意な差が検出され(「ある」者において平均得点が有意に高い)、「現在の状態」に含まれる各状態及びその全体が、性的被害経験の影響によってもたらされた「心理的損傷 (psychological toll)」であることが示唆された。

表6 性的被害の有無間での「現在の状態」の差の検定－T検定－

|                 | 等分散性のための<br>Levene の検定 | 2つの母平均の差の検定 |          |        |         |              |           |                    |          |
|-----------------|------------------------|-------------|----------|--------|---------|--------------|-----------|--------------------|----------|
|                 |                        | F 値         | 有意<br>確率 | t 値    | 自由度     | 有意確率<br>(両側) | 平均値の<br>差 | 差の95%信頼区間<br>下限 上限 |          |
| 悲しい気分得点         | 等分散を仮定する。              | 33.858      | .000     | -3.936 | 802     | .000         | -.2621    | -.39278            | -.13136  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -4.603 | 343.086 | .000         | -.2621    | -.37406            | -.15008  |
| 男性不信得点          | 等分散を仮定する。              | 11.957      | .001     | -3.960 | 803     | .000         | -.2906    | -.43465            | -.14655  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -4.263 | 296.682 | .000         | -.2906    | -.42474            | -.15645  |
| 怒りの気分得点         | 等分散を仮定する。              | 57.199      | .000     | -4.567 | 802     | .000         | -.2952    | -.42213            | -.16833  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -5.483 | 361.203 | .000         | -.2952    | -.40113            | -.18933  |
| 不安・恐れ得点         | 等分散を仮定する。              | 4.358       | .037     | -5.447 | 801     | .000         | -.4499    | -.61209            | -.28781  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -5.863 | 296.980 | .000         | -.4499    | -.60099            | -.29891  |
| 無力感得点           | 等分散を仮定する。              | 2.874       | .090     | -3.818 | 803     | .000         | -.3246    | -.49148            | -.15771  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -3.979 | 282.393 | .000         | -.3246    | -.48515            | -.16404  |
| コントロール<br>欲求得点  | 等分散を仮定する。              | 2.143       | .144     | -3.470 | 802     | .001         | -.2733    | -.42793            | -.11872  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -3.683 | 287.669 | .000         | -.2733    | -.41938            | -.12727  |
| 自己非難得点          | 等分散を仮定する。              | 2.356       | .125     | -6.460 | 804     | .000         | -.4941    | -.64422            | -.34397  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -6.998 | 299.319 | .000         | -.4941    | -.63305            | -.35515  |
| 自己羞恥得点          | 等分散を仮定する。              | 21.613      | .000     | -4.671 | 804     | .000         | -.3221    | -.45747            | -.18674  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -5.394 | 334.371 | .000         | -.3221    | -.43956            | -.20465  |
| 特異感得点           | 等分散を仮定する。              | 30.559      | .000     | -5.321 | 802     | .000         | -.3841    | -.52577            | -.24239  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -6.265 | 347.543 | .000         | -.3841    | -.50466            | -.26350  |
| セックスへの<br>嫌悪感得点 | 等分散を仮定する。              | 15.918      | .000     | -3.648 | 802     | .000         | -.2566    | -.39473            | -.11852  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -4.131 | 316.620 | .000         | -.2566    | -.37886            | -.13439  |
| 性への抵抗得点         | 等分散を仮定する。              | .488        | .485     | -2.632 | 801     | .009         | -.2205    | -.38488            | -.05603  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -2.640 | 265.577 | .009         | -.2205    | -.38489            | -.05602  |
| 性的混乱得点          | 等分散を仮定する。              | .123        | .725     | -3.018 | 795     | .003         | -.2153    | -.35538            | -.07530  |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -3.154 | 274.660 | .002         | -.2153    | -.34974            | -.08094  |
| 「現在の状態」<br>合計得点 | 等分散仮定する。               | 6.483       | .011     | -6.667 | 804     | .000         | -3.7913   | -4.90754           | -2.67496 |
|                 | 等分散を仮定しない。             |             |          | -7.386 | 310.665 | .000         | -3.7913   | -4.80118           | -2.78132 |

## 3-2-2. 主成分分析とT検定

## 3-2-2-1. 主成分分析-「現在の状態」の12変量の2つの主成分への総合化- [表7]

「現在の状態」の12項目(変量)について、少数の主成分への総合化のために、(相関行列による)主成分分析を行った。この際、固有値が1以上という選択基準を採用し、2つの主成分を取り上げた。

因子負荷量に着目すると、

第1主成分に大きな因子負荷を持つ、つまり第1主成分に所属する説明変量:「悲しい気分」「男性不信」「怒りの気分」「不安・恐れ」「無力感」「コントロール欲求」「自己非難」「自己羞恥」「特異感」の9つ。

第2主成分に大きな因子負荷を持つ、つまり第2主成分に所属する説明変量:「セックスへの嫌悪感」「性への抵抗」「性的混乱」の3つ。

それぞれの主成分に大きな因子負荷を持つ説明変量に注目すると、両主成分とも「心理的損傷」を表すが、第1主成分は「非性的」であるのに対して第2主成分は「性的」であることから、2つの主成分に表れる総合的特性を次のように解釈・命名した。

第1主成分……「非性的心理的損傷」

第2主成分……「性的心理的損傷」

こうして、主成分分析によって、12個の説明変量が2つの主成分に総合化された(まとめられた)ことになる。

表7 「現在の状態」の12項目についての主成分分析  
(相関行列による方法)

|             | 成 分       |           |
|-------------|-----------|-----------|
|             | 1         | 2         |
| 悲しい気分得点     | .751      | .178      |
| 男性不信得点      | .569      | .238      |
| 怒りの気分得点     | .682      | .143      |
| 不安・恐れ得点     | .773      | .236      |
| 無力感得点       | .702      | .207      |
| コントロール欲求得点  | .594      | 5.800E-02 |
| 自己非難得点      | .653      | .278      |
| 自己羞恥得点      | .677      | .286      |
| セックスへの嫌悪感得点 | .565      | .229      |
| 性への抵抗得点     | .351      | .695      |
| 性的混乱得点      | 7.545E-02 | .859      |
|             | .208      | .822      |

因子抽出法:主成分分析

回転法:Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

### 3-2-2-2. T検定-性的被害経験が「1つもない」グループと「1つ以上ある」グループとの間での2つの主成分得点の平均値の差の検定- [表8]

前項3-2-2-1で析出された2つの主成分の主成分得点を算出し、その平均値(母平均)が、被害経験が「1つもない」グループ(以下「ない」グループと表記)と「1つ以上ある」グループ(以下「ある」グループと表記)との間で差があるかどうかを調べるためにT検定を行った。

T検定の結果、第1主成分「非性的心理的損傷」の主成分得点も第2主成分「性的心理的損傷」の主成分得点も共に、性的被害経験が「ある」グループのほうが「ない」グループよりも有意にその平均値(母平均)は高いことが明らかとなった。

したがって、性的被害経験が「ある」グループのほうが、第1主成分「非性的心理的損傷」と第2主成分「性的心理的損傷」との両方の特性を、「ない」グループに比べて有意に多く備えてい

表8 T検定—性的被害経験が「1つもない」グループと「1つ以上ある」グループとの間での2つの主成分得点の平均値の差の検定—

|               | 等分散性のためのLeveneの検定 | 2つの母平均の差の検定 |      |        |         |          |           |           |           |          |
|---------------|-------------------|-------------|------|--------|---------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|
|               |                   | F値          | 有意確率 | t値     | 自由度     | 有意確率(両側) | 平均値の差     | 差の標準誤差    | 差の95%信頼区間 |          |
|               |                   |             |      |        |         |          |           |           | 下限        | 上限       |
| 主成分1：非性的心理的損傷 | 等分散を仮定する。         | 10.587      | .001 | -6.357 | 787     | .000     | -.5442504 | .08562106 | -.712323  | -.376178 |
|               | 等分散を仮定しない。        |             |      | -7.045 | 296.856 | .000     | -.5442504 | .07724890 | -.696275  | -.392226 |
| 主成分2：性的心理的損傷  | 等分散を仮定する。         | .490        | .484 | -2.271 | 787     | .023     | -.1987407 | .08750517 | -.370512  | -.026970 |
|               | 等分散を仮定しない。        |             |      | -2.354 | 267.923 | .019     | -.1987407 | .08441684 | -.364945  | -.032536 |

ることになる。まさに、この両方の主成分とも、性的被害経験の影響によってもたらされ、深められた「心理的損傷」の意味合いをもつ成分であることが、このT検定の結果、確認されたと言える（つまり、前項で両主成分の意味する共通の総合的特性を「心理的損傷」と解釈・命名したことは妥当であったことになる）。

ちなみに、第1主成分のほうが第2主成分と比較して、tの絶対値が高く、有意確率Pの値が低いことから、第1主成分「非性的心理的損傷」のほうが第2主成分「性的心理的損傷」よりも両グループ間の平均値の差が大きく、それだけ性的被害経験の結果もたらされ深められた成分である度合いが高い、と指摘できる。

以上において、「現在の状態」に含まれる各状態及びその全体が、性的被害経験の影響によってもたらされた「心理的損傷」であることが示され、また、12変量から抽出された2つの主成分のいずれも性的被害経験の影響によってもたらされ、深められた「心理的損傷」の意味合いをもつ成分であることが確認されたが、ここで言う「心理的損傷」は、被害者自身によって、自らの受けた性的被害経験との意識的な関連づけが必ずしも行われていないものであって、多く客観的にのみ性的被害経験の結果として確認されうるトラウマであることから、「客観的トラウマ変数」として位置づけるのが適切であろう。

#### 4. 主観的トラウマ変数

##### 4-1. 主観的トラウマ変数の概念

性的被害経験者が、これまで受けた被害の中で「最も不快だったり、最も傷ついた被害」と認識する1つの被害をめぐる、その被害種類、被害の開始時期、加害者のタイプ、加害者の性別、加害者の年齢、被害回数、被害継続期間、抵抗できた程度、相談の有無と相手、被害時の動揺の程度、被害が回答者の人生に及ぼした影響の程度、について回答を求めた。

うち、動揺の程度は、「極度に動揺」(14.4)、「非常に動揺」(48.5)、「やや動揺」(29.8)、「あまり動揺しなかった」(6.3)、「全く動揺しなかった」(1.0)の5件法で、影響の程度は、「大きな影響」(6.5)、「かなりの影響」(22.7)、「あまり影響しなかった」(54.6)、「全く影響はない」(16.3)の4件法で答えてもらった（括弧内は有効％）。

この動揺の程度と影響の程度とをそれぞれ得点化した場合、動揺+（影響×2）によってその値が算出される変数が「主観的トラウマ変数」(subjective trauma variable)である。この操作的に定義された概念はダイアナ・ラッセル [Russell 1986: 138-139] に拠るもので、動揺・影響が被害の結果であることが被害者自身によって主観的に認知されていることから「主観的」トラウマ変数と呼ばれるのである。

## 4-2. 性的被害の特性諸要因が主観的トラウマ変数に及ぼす影響—重回帰分析—

## 4-2-1. 重回帰分析 (I) —性的被害の10個の特性要因が主観的トラウマ変数に及ぼす影響度の分析— [表9]

性的被害の特性諸要因が主観的トラウマ変数に及ぼす影響度を探るために、説明変数=10特性要因(非接触的被害・接触的被害の別、被害開始時期、加害者のタイプ:加害者は家族・親族かそれ以外か、加害者のタイプ:加害者は見知らぬ人かそれ以外か、加害者のタイプ:複数の加害者かそれ以外か、加害者の年齢、被害の頻度、被害継続期間、抵抗できた程度、相談の有無)、目的変数=主観的トラウマ変数、とする重回帰分析を実施した。分析の結果、被害の頻度、加害者のタイプ:家族・親族かそれ以外か、加害者のタイプ:複数の加害者かそれ以外か、の3変数が主観的トラウマ変数に有意な影響を与える要因であること、そして、それらの影響度は、強いものから、被害の頻度→加害者は家族・親族かそれ以外か→複数の加害者かそれ以外か、の順序であることが判明した。

表9 重回帰分析 (I) —説明変数=10特性要因、目的変数=主観的トラウマ変数、とする重回帰分析(ステップワイズ法)<sup>a</sup>—

| モデル  | 非標準化係数                          |                              | 標準化係数                | t                                 | 有意率                          | 相関係数                 |                      |                      | 共線性の統計量              |                      |
|--|---------------------------------|------------------------------|----------------------|-----------------------------------|------------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
|  | B                               | 標準誤差                         | ベータ                  |                                   |                              | ゼロ次                  | 偏                    | 部分                   | 許容度                  | VIF                  |
| 1 (定数)<br>被害の頻度  | 4.439<br>.533                   | .296<br>.155                 | .283                 | 14.977<br>3.436                   | .000<br>.001                 | .283                 | .283                 | .283                 | 1.000                | 1.00                 |
| 2 (定数)<br>被害の頻度<br>加害者は家族・親族<br>かそれ以外か                     | 4.462<br>.441<br>1.587          | .290<br>.155<br>.578         | .234<br>.226         | 15.406<br>2.841<br>2.746          | .000<br>.005<br>.007         | .283<br>.276         | .238<br>.230         | .228<br>.221         | .953<br>.953         | 1.05<br>1.05         |
| 3 (定数)<br>被害の頻度<br>加害者は家族・親族<br>かそれ以外か<br>複数の加害者かそれ<br>以外か | 4.375<br>.452<br>1.649<br>1.793 | .288<br>.153<br>.570<br>.808 | .239<br>.235<br>.176 | 15.180<br>2.951<br>2.891<br>2.219 | .000<br>.004<br>.004<br>.028 | .283<br>.276<br>.152 | .247<br>.242<br>.188 | .234<br>.229<br>.176 | .952<br>.951<br>.996 | 1.05<br>1.05<br>1.00 |

a. 従属変数: 主観的トラウマ変数 (動揺得点+影響得点×2)

ただし、上記の10説明変数中、「被害の頻度」と「被害継続期間」との間に多重共線性の存在が想定でき、「被害継続期間」が、本項で実施したステップワイズ法の重回帰分析で回帰式における有効な変数として最後まで選択されなかったのは「被害の頻度」との相関が高かったためとも考えられたので、この「被害の頻度」を除く9説明変数で再度重回帰分析を試みた。

## 4-2-2. 重回帰分析 (II) —性的被害の9個の特性要因(「被害の頻度」を除去)が主観的トラウマ変数に及ぼす影響度の分析— [表10]

上述のように「被害継続期間」との間に線型関係の存在が想定できる「被害の頻度」を説明変数から除去して、説明変数=性的被害の9特性要因(非接触的被害・接触的被害の別、被害開始時期、加害者のタイプ:加害者は家族・親族かそれ以外か、加害者のタイプ:加害者は見知らぬ人かそれ以外か、加害者のタイプ:複数の加害者かそれ以外か、加害者の年齢、被害継続期間、抵抗できた程度、相談の有無)と設定し、これら9個の特性諸要因が主観的トラウマ変数に及ぼす影響度を探るべく、目的変数=主観的トラウマ変数とする重回帰分析を再度実施した。分析の結果、加害者のタイプ:家族・親族かそれ以外か、加害者のタイプ:複数の加害者かそれ以外か、被害継続期間、の3変数が主観的トラウマ変数に有意な影響を与える要因であること、そして、それらの影響度は、強いものから、加害者は家族・親族かそれ以外か→複数の加害者かそれ以外か→被害継続期間、の順序であることが判明した。



表10 重回帰分析(II) —説明変数=9特性要因(「被害の頻度」を除去)、目的変数=主観的トラウマ変数、とする重回帰分析(ステップワイズ法)<sup>a</sup>—

| モデル                       | 非標準化係数 |      | 標準化係数 | t      | 有意率  | 相関係数 |      |      | 共線性の統計量 |       |
|---------------------------|--------|------|-------|--------|------|------|------|------|---------|-------|
|                           | B      | 標準誤差 | ベータ   |        |      | ゼロ次  | 偏    | 部分   | 許容度     | VIF   |
| 1 (定数)<br>加害者は家族・親族かそれ以外か | 5.131  | .160 |       | 32.029 | .000 |      |      |      |         |       |
|                           | 1.960  | .574 | .278  | 3.418  | .001 | .278 | .278 | .278 | 1.000   | 1.000 |
| 2 (定数)<br>加害者は家族・親族かそれ以外か | 5.064  | .161 |       | 31.381 | .000 |      |      |      |         |       |
|                           | 2.027  | .567 | .288  | 3.572  | .000 | .278 | .291 | .287 | .997    | 1.003 |
| 複数の加害者かそれ以外か              | 1.736  | .823 | .170  | 2.110  | .037 | .154 | .177 | .170 | .997    | 1.003 |
|                           | 4.698  | .245 |       | 19.212 | .000 |      |      |      |         |       |
| 3 (定数)<br>加害者は家族・親族かそれ以外か | 1.760  | .577 | .250  | 3.049  | .003 | .278 | .252 | .243 | .943    | 1.061 |
|                           | 1.809  | .815 | .177  | 2.220  | .028 | .154 | .186 | .177 | .995    | 1.005 |
| 被害継続期間                    | .183   | .093 | .162  | 1.979  | .050 | .211 | .167 | .158 | .943    | 1.061 |

a.従属変数:主観的トラウマ変数(動揺得点+影響得点×2)

#### 4-2-3. 重回帰分析のまとめ [表11]

以上の、目的変数=主観的トラウマ変数、説明変数=性的被害の特性諸要因とする2つの重回帰分析の結果を、標準偏回帰係数を中心に整理して表示すると、表11ようになる。

この表には、説明変数として「被害の頻度」を含む場合と含まない場合のそれぞれの重回帰分析(ステップワイズ法)において、目的変数=主観的トラウマ変数を予測・説明する上で有効な変数として選択された変数、及びその標準偏回帰係数が示されており、さらに、「被害の頻度」を含む場合と含まない場合との標準偏回帰係数の平均値も示されている。なお、「被害の頻度」と「被害継続期間」の両変数間には多重共線性が存在するために、「被害継続期間」は重回帰分析(I)では「被害の頻度」が選択された結果排除され、「被害の頻度」を除去した重回帰分析(II)においてのみ有効な変数として選択されたものと解釈できる。

この表に拠って判断すると、分析に導入した10個の説明変数=性的被害の特性要因のうち、目的変数=主観的トラウマ変数に有意な影響を与えている変数は4つであり、そして、平均値の列に着目すると、その影響度の順位は高いものから低いものへの順に、加害者は家族・親族かそれ以外か→被害の頻度→複数の加害者かそれ以外か→被害継続期間、となっている。

そして、標準偏回帰係数(ベータ)及びt値の符号の向きから、「加害者が家族・親族以外であるよりは家族・親族のほうが」、「被害の頻度が少ないよりは多いほうが」、「単数の加害者からの被害であるよりは複数の加害者からの被害であるほうが」、「被害継続期間が短いよりは長いほうが」、被害者の主観的なトラウマ感は強くなる、と解釈できる。

以上から、なによりも、「加害者が家族・親族」であること、つまり、「インセスト(近親姦)」であることが、被害者たちが主観的に捉えるトラウマの程度を最も高める要因であることが知られる。「インセスト」であるか否かが、被害者の意識平面で把握されるトラウマの強さに最も大きな影響を与える特性要因であることが、今回の重回帰分析の結果鮮明になった、と言えよう\*。

\*ただし、表11から明らかなように、「加害者が家族・親族かそれ以外か」と「被害の頻度」との間に標準偏回帰係数の有意差は見られない。有意差は、「加害者が家族・親族かそれ以外か」及び「被害の頻度」と「複数の加害者かそれ以外か」及び「被害継続期間」との間に認められるにすぎない。

今回の我々の調査データに基づく重回帰分析では、諸他の特性要因については、主観的トラウマ変数に対する有意な影響を認定することはできなかった。

表11 重回帰分析のまとめ－「被害の頻度」を含む場合と除去した場合とにおいて有効な変数として選択された説明変数とその標準偏回帰係数－

| 説明変数            | (I)標準偏回帰係数<br>[「被害の頻度」を含む場合] | (II)標準偏回帰係数<br>[「被害の頻度」を除去した場合] | 平均値   |
|-----------------|------------------------------|---------------------------------|-------|
| 被害の頻度           | 0.239(t=2.951,p=0.004)       | —                               | 0.239 |
| 加害者は家族・親族かそれ以外か | 0.235(t=2.891,p=0.004)       | 0.250(t=3.049,p=0.003)          | 0.243 |
| 複数の加害者かそれ以外か    | 0.176(t=2.219,p=0.028)       | 0.177(t=2.220,p=0.028)          | 0.177 |
| 被害継続期間          | —                            | 0.162(t=1.979,p=0.050)          | 0.162 |

## 5. 過去および／または現在の諸症状

## (＝複雑性〔複合型〕外傷後ストレス障害の諸症状)

## 5-1. 複雑性（複合型）PTSDを構成する諸症状の有無・頻度 [表12～表13]

回答者における過去および／または現在の諸症状を把握するために、ジュディス・L・ハーマンの複雑性 PTSD [Herman 1992=1996: 186-191], 及びヴァン・デア・コークの複合型 PTSD [van der kolk 1994: 148; 齊藤 1997: 43-48] を構成する諸症状からピックアップして、21の症状項目のリストを作成し、各症状について有無および頻度を尋ねた。単純集計結果は表12に示すとおりである。見られるとおり、「ない」が最も少ない、つまり「ある」が最も多いのは「頭痛、胸痛、腹痛など」、以下、「胃腸不調」「集中困難」「反復的な自己防衛失敗」とづく。なお、表13に見るとおり、21の症状のどれか1つでも僅かであれ過去および／または現在に経験した／経験している者の比率は87.5%にのぼる。

表12 PTSD症状の有無・頻度

単位：％，人

| PTSD症状         | ない   | めったにない | 時々ある | しばしばある | 回答者数 |
|----------------|------|--------|------|--------|------|
| 摂食障害           | 75.6 | 9.8    | 11.9 | 2.6    | 795  |
| 薬物・アルコール依存     | 84.9 | 7.5    | 5.8  | 1.8    | 797  |
| 自傷行為           | 92.1 | 5.4    | 2.1  | 0.4    | 795  |
| 自殺願望           | 65.0 | 20.6   | 11.0 | 3.4    | 800  |
| 強迫性衝動          | 77.2 | 17.2   | 5.5  | 0.1    | 797  |
| 記憶喪失感(健忘)      | 87.8 | 7.4    | 4.5  | 0.3    | 795  |
| フラッシュバック(再体験)* | 74.4 | 17.1   | 7.6  | 1.0    | 726  |
| 悪夢(再体験)*       | 87.7 | 9.7    | 2.1  | 0.6    | 725  |
| 入眠困難・睡眠維持の困難   | 53.8 | 24.2   | 18.0 | 4.0    | 794  |
| 集中困難           | 48.9 | 28.0   | 21.2 | 1.9    | 793  |
| 胃腸不調           | 45.7 | 19.3   | 28.2 | 6.8    | 797  |
| 頭痛、胸痛、腹痛など     | 38.8 | 22.6   | 31.8 | 6.8    | 793  |
| 喘息、過呼吸、息苦しさなど  | 72.7 | 15.1   | 11.2 | 1.0    | 795  |
| 歩行障害、失声など      | 95.5 | 2.9    | 1.4  | 0.3    | 794  |
| 性的不能           | 74.9 | 12.3   | 7.6  | 5.3    | 780  |
| 加害者に対する復讐への没頭* | 89.0 | 6.7    | 2.7  | 1.6    | 672  |
| 加害者の理想化*       | 90.3 | 7.6    | 1.5  | 0.6    | 661  |
| 親密な対人関係不可      | 76.9 | 12.1   | 7.5  | 3.4    | 784  |
| 他人を犠牲者にする      | 74.7 | 17.6   | 6.8  | 0.9    | 791  |
| 反復的な自己防衛失敗     | 53.0 | 39.4   | 6.7  | 0.9    | 787  |
| 希望喪失と絶望の感覚     | 65.9 | 17.2   | 14.3 | 2.5    | 790  |

[注] \*の付されている項目については、更に「被害の経験はない」あるいは「被害経験がないから加害者はいない」の選択肢が付加されているが、表ではこれらの選択肢への回答を除外して合計値を求め、%が算出されている。

表13 過去および／または現在における PTSD 症状の経験率 (全体)

|                 | 度数  | パーセント | 有効パーセント | 累積パーセント |
|-----------------|-----|-------|---------|---------|
| 有効 PTSD 症状全くなし  | 100 | 12.3  | 12.5    | 12.5    |
| PTSD 症状多少なりともあり | 701 | 86.4  | 87.5    | 100.0   |
| 合計              | 801 | 98.8  | 100.0   |         |
| 欠損値 システム欠損値     | 10  | 1.2   |         |         |
| 合計              | 811 | 100.0 |         |         |

## 5-2. 性的被害経験が PTSD 症状に及ぼす影響

## 5-2-1. T検定—性的被害経験の有・無間での症状得点の平均値の差の検定— [表14]

21項目の PTSD 症状を得点化し、性的被害経験が1つでも「ある」者と全く「ない」者との間で、各症状ごとの得点、及び21の症状の合計得点の(母)平均値に差があるかどうかを見るために、T検定を行った。この結果、21の症状得点の全て、及び21症状の合計得点において両者の間で(母)平均値に有意な差があることが判明した。なお、検定対象となった平均値の全てにおいて、「ある」グループのほうが「ない」グループよりもその値が高かった。

以上から、複雑性(複合型) PTSD を構成する21症状の全ての発症・罹患について、また、いわばこれらの諸症状の複合である複雑性(複合型) PTSD それ自体の発症・罹患に対して、性的被害経験が影響を与えていることが社会統計学的に明らかになったと言える。リストアップされた諸症状のいずれか/いくつか、または、それらの複合としての複雑性(複合型) PTSD に苦しんでいる回答者たちは、彼女たちが受けた性的被害の後遺症として、それ/それらに苦しんでいる可能性が濃厚であると言える。

表14 T検定—性的被害経験の有・無間での PTSD の各症状得点及び  
症状合計得点の平均値の差の検定—

|                  | 等分散のための<br>Leveneの<br>検定 | 2つの母平均の差の検定 |             |         |         |                     |               |            |                         |        |
|------------------|--------------------------|-------------|-------------|---------|---------|---------------------|---------------|------------|-------------------------|--------|
|                  |                          | F値          | 有<br>確<br>率 | t値      | 自由度     | 有<br>確<br>率<br>(両側) | 平均値<br>の<br>差 | 差の標準<br>誤差 | 差の95%信頼<br>区<br>間<br>下限 | 上限     |
| 摂食障害得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 96.421      | .000        | -4.689  | 793     | .000                | -.3248        | .06928     | -.46082                 | -.1888 |
|                  |                          |             |             | -6.164  | 415.226 | .000                | -.3248        | .05270     | -.42842                 | -.2212 |
| 薬物・アルコール<br>依存得点 | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 93.481      | .000        | -4.419  | 795     | .000                | -.2443        | .05528     | -.35281                 | -.1358 |
|                  |                          |             |             | -7.284  | 730.528 | .000                | -.2443        | .03354     | -.31014                 | -.1785 |
| 自傷得点             | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 69.822      | .000        | -3.881  | 793     | .000                | -.1361        | .03506     | -.20489                 | -.0673 |
|                  |                          |             |             | -7.646  | 631.000 | .000                | -.1361        | .01780     | -.17102                 | -.1011 |
| 自殺企図得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 58.933      | .000        | -4.596  | 798     | .000                | -.3260        | .07094     | -.46529                 | -.1868 |
|                  |                          |             |             | -5.773  | 372.051 | .000                | -.3260        | .05648     | -.43710                 | -.2150 |
| 性欲亢進得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 93.208      | .000        | -4.515  | 795     | .000                | -.2220        | .04917     | -.31852                 | -.1255 |
|                  |                          |             |             | -5.945  | 415.617 | .000                | -.2220        | .03734     | -.29541                 | -.1486 |
| 記憶喪失得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 39.875      | .000        | -3.026  | 793     | .003                | -.1319        | .04358     | -.21742                 | -.0463 |
|                  |                          |             |             | -4.043  | 425.987 | .000                | -.1319        | .03262     | -.19600                 | -.0678 |
| フラッシュバック<br>得点   | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 296.53      | .000        | -6.615  | 724     | .000                | -.4222        | .06382     | -.54749                 | -.2969 |
|                  |                          |             |             | -14.726 | 603.000 | .000                | -.4222        | .02867     | -.47849                 | -.3659 |
| 悪夢得点             | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 78.553      | .000        | -4.014  | 723     | .000                | -.1770        | .04410     | -.26358                 | -.0904 |
|                  |                          |             |             | -8.200  | 717.112 | .000                | -.1770        | .02159     | -.21938                 | -.1345 |
| 不眠・覚醒得点          | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 7.935       | .005        | -2.607  | 792     | .009                | -.2041        | .07829     | -.35778                 | -.0504 |
|                  |                          |             |             | -2.879  | 293.796 | .004                | -.2041        | .07090     | -.34363                 | -.0646 |
| 集中困難得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 1.281       | .258        | -2.278  | 791     | .023                | -.1695        | .07438     | -.31549                 | -.0235 |
|                  |                          |             |             | -2.354  | 263.527 | .019                | -.1695        | .07199     | -.31123                 | -.0277 |
| 胃腸不調得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | .350        | .554        | -1.976  | 795     | .048                | -.1737        | .08789     | -.34619                 | -.0011 |
|                  |                          |             |             | -2.052  | 267.214 | .041                | -.1737        | .08463     | -.34029                 | -.0071 |
| 頭痛等得点            | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 1.148       | .284        | -2.382  | 791     | .017                | -.2057        | .08634     | -.37516                 | -.0362 |
|                  |                          |             |             | -2.462  | 266.098 | .014                | -.2057        | .08354     | -.37016                 | -.0412 |
| 喘息等得点            | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 36.717      | .000        | -3.212  | 793     | .001                | -.2030        | .06319     | -.32705                 | -.0790 |
|                  |                          |             |             | -3.751  | 323.297 | .000                | -.2030        | .05413     | -.30949                 | -.0965 |
| 歩行障害・失声得<br>点    | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 36.283      | .000        | -2.890  | 792     | .004                | -.0810        | .02801     | -.13594                 | -.0260 |
|                  |                          |             |             | -5.667  | 629.000 | .000                | -.0810        | .01429     | -.10901                 | -.0529 |
| セックス不能得点         | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 17.448      | .000        | -2.437  | 778     | .015                | -.1819        | .07464     | -.32837                 | -.0353 |
|                  |                          |             |             | -2.719  | 290.173 | .007                | -.1819        | .06689     | -.31351                 | -.0502 |
| 加害者への復讐得<br>点    | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 28.183      | .000        | -2.559  | 670     | .011                | -.1508        | .05893     | -.26653                 | -.0351 |
|                  |                          |             |             | -3.774  | 220.045 | .000                | -.1508        | .03996     | -.22958                 | -.0721 |
| 加害者理想化得点         | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 44.963      | .000        | -3.101  | 659     | .002                | -.1444        | .04656     | -.23579                 | -.0529 |
|                  |                          |             |             | -7.668  | 567.000 | .000                | -.1444        | .01883     | -.18135                 | -.1074 |
| 親密な関係不可能<br>得点   | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 52.999      | .000        | -3.679  | 782     | .000                | -.2495        | .06782     | -.38262                 | -.1164 |
|                  |                          |             |             | -4.738  | 376.936 | .000                | -.2495        | .05266     | -.35304                 | -.1460 |
| いじめ得点            | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 95.251      | .000        | -4.738  | 789     | .000                | -.2645        | .05582     | -.37405                 | -.1549 |
|                  |                          |             |             | -6.346  | 431.197 | .000                | -.2645        | .04168     | -.34639                 | -.1826 |
| 再被害化得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 412.44      | .000        | -13.175 | 785     | .000                | -.6926        | .05257     | -.79577                 | -.5894 |
|                  |                          |             |             | -25.185 | 682.767 | .000                | -.6926        | .02750     | -.74658                 | -.6386 |
| 希望不能得点           | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 18.695      | .000        | -2.514  | 788     | .012                | -.1839        | .07317     | -.32755                 | -.0403 |
|                  |                          |             |             | -2.805  | 287.664 | .005                | -.1839        | .06558     | -.31300                 | -.0549 |
| PTSD 合計得点        | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。  | 44.687      | .000        | -7.304  | 799     | .000                | 4.8105        | .65866     | 6.1034                  | -3.518 |
|                  |                          |             |             | -9.996  | 460.672 | .000                | 4.8105        | .48123     | 5.7562                  | -3.865 |

## 5-2-2. 主成分分析とT検定

## 5-2-2-1. 主成分分析-21の PTSD 症状の4つの主成分への総合化- [表15]

表15 21の PTSD 症状の主成分分析 (相関行列による方法)

|              | 成分         |            |           |           |
|--------------|------------|------------|-----------|-----------|
|              | 1          | 2          | 3         | 4         |
| 胃腸不調得点       | .782       | .166       | 1.997E-03 | .140      |
| 頭痛等得点        | .767       | .206       | 6.623E-02 | .125      |
| 不眠・覚醒得点      | .672       | .157       | .211      | .140      |
| 集中困難得点       | .661       | .343       | 9.090E-02 | .135      |
| 喘息等得点        | .445       | .315       | .147      | .203      |
| 性欲亢進得点       | .401       | -4.775E-02 | .251      | .214      |
| 親密な関係不可能得点   | 7.614E-02  | .763       | 3.830E-02 | .121      |
| 希望不能得点       | .263       | .669       | 7.843E-02 | .280      |
| セックス不能得点     | .135       | .646       | .183      | 9.627E-03 |
| いじめ得点        | .248       | .608       | .109      | .143      |
| 記憶喪失得点       | .243       | .366       | .321      | .157      |
| 歩行障害・失声得点    | 8.819E-02  | .341       | .132      | .153      |
| 悪夢得点         | .178       | 4.302E-02  | .735      | .110      |
| 加害者理想化得点     | .101       | .249       | .735      | 1.037E-02 |
| フラッシュバック得点   | .201       | 2.143E-02  | .711      | .218      |
| 加害者への復讐得点    | -4.234E-02 | .208       | .687      | 5.396E-02 |
| 再被害化得点       | .128       | .179       | .382      | .357      |
| 自傷得点         | .111       | 6.335E-02  | .254      | .725      |
| 薬物・アルコール依存得点 | .165       | .115       | 1.989E-03 | .676      |
| 摂食障害得点       | .169       | .306       | 6.486E-02 | .635      |
| 自殺企図得点       | .316       | .289       | .184      | .559      |

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

リストアップされた、複雑性（複合型）PTSDを構成する21の症状（変数）について、少数の主成分へ総合化するために、相関行列による主成分分析を行った。この際、抽出基準に「最小の固有値=1」を用い、4つの主成分を抽出した。

因子負荷量（主成分負荷量）に着目すると、各主成分へ所属する変数、及び各主成分の解釈・命名は以下ようになる。

第1主成分に所属する変数は、「胃腸不調」「頭痛・胸痛・腹痛など」「入眠困難・睡眠維持の困難」「集中困難」「喘息、過呼吸、息苦しさなど」「強迫的性衝動」の6変数。「過敏症的な身体化／覚醒・欲求亢進」の主成分と命名。

第2主成分に所属する変数は、「親密な対人関係不可」「希望喪失と絶望の感覚」「性的不能」「他人を犠牲者にする」「記憶喪失感」「歩行障害、失声など」の6変数。「他者・自己との関係障害」の主成分と命名。

第3主成分に所属する変数は、「悪夢」「加害者の理想化」「フラッシュバック」「加害者に対する復讐への没頭」「反復的な自己防衛失敗」の5変数。「被害場面／加害者との関係の侵襲的・強迫的な再体験化傾向」の主成分と命名。

第4因子に所属する変数は、「自傷行為」「薬物・アルコール依存」「摂食障害」「自殺願望」の4変数。「自己破壊行動傾向」の主成分と命名。

## 5-2-2-2. T検定—性的被害経験の有・無間での4つの主成分得点の平均値の差の検定—[表16]

表16 T検定—性的被害経験の有・無間での4つの主成分得点の平均値の差の検定—

|                                      | 等分散性のための Levene の検定     | 2つの母平均の差の検定 |      |                   |                |              |                        |                        |                        |                          |
|--------------------------------------|-------------------------|-------------|------|-------------------|----------------|--------------|------------------------|------------------------|------------------------|--------------------------|
|                                      |                         | F値          | 有意率  | t値                | 自由度            | 有意率(両側)      | 平均値の差                  | 差の標準誤差                 | 差の95%信頼区間              |                          |
|                                      |                         |             |      |                   |                |              |                        |                        | 下限                     | 上限                       |
| 主成分得点1 (過敏症的な身体化/覚醒・欲求亢進)            | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。 | 2.322       | .128 | -1.302<br>-1.441  | 625<br>125.680 | .193<br>.152 | -.1503644<br>-.1503644 | .11546118<br>.10435604 | .37710318<br>.35688698 | .07637448<br>.05615828   |
| 主成分得点2 (他者・自己との関係障害)                 | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。 | 30.968      | .000 | -2.383<br>-3.750  | 625<br>212.572 | .017<br>.000 | -.2742983<br>-.2742983 | .11509594<br>.07313870 | 5.0031990<br>4.1846834 | -.04827672<br>-.13012829 |
| 主成分得点3 (被害場面/加害者との関係の侵入的・強迫的な再体験化傾向) | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。 | 36.544      | .000 | -4.570<br>-10.171 | 625<br>599.747 | .000<br>.000 | -.5197066<br>-.5197066 | .11373349<br>.05109897 | .74305269<br>.62006130 | .29636058<br>-.41935197  |
| 主成分得点4 (自己破壊行動傾向)                    | 等分散を仮定する。<br>等分散を仮定しない。 | 29.963      | .000 | -4.863<br>-9.069  | 625<br>340.886 | .000<br>.000 | -.5519476<br>-.5519476 | .11349020<br>.06085795 | .77481592<br>.67165204 | .32907935<br>-.43224324  |

以上の主成分分析によって抽出された4つの主成分の主成分得点を算出し、被害経験が1つ以上「ある」グループと1つも「ない」グループとの間でこの主成分得点の母平均に差があるかどうかを検定するためのT検定を行った。すると、第1主成分「過敏症的な身体化/覚醒・欲求亢進」を除く第2主成分「他者・自己との関係障害」、第3主成分「被害場面/加害者との関係の侵入的・強迫的な再体験化傾向」、第4主成分「自己破壊行動傾向」の3つの主成分について両グループの間で主成分得点の母平均に差があると判定できた。4つの主成分全てについて主成分得点の平均値は「ある」グループにおいて高かったが、上記の3主成分についてはその差に有意性が認められたわけである。こうして、この3つの主成分は、性的被害経験によってもたらされた後遺症の意味合いをもつ症状特性であることが社会統計学的に確認されたことになる。したがって、性的被害は、この3つの主成分=症状特性を介して、それらに負荷をもつ諸症状、及びその総体としての複雑性(複合型)PTSD自体にインパクトを与えるものと解釈できよう\*。

\* 前項(5-2-1)のT検定結果において、性的被害の有無間で有意差のない第1因子に所属する「胃腸不調」「頭痛・胸痛・腹痛など」「入眠困難・睡眠維持の困難」「集中困難」「喘息、過呼吸、息苦しさなど」「強迫性衝動」の6つの症状項目に有意差が認められたことについては、これら6変数が、有意差のある第2~第4主成分に主成分負荷を持っていることから説明できるであろう。

## 5-3. PTSD症状と「現在の状態」(=心理的損傷状態)との関係

## —クロス集計及びカイ2乗検定— [表17]

表17は、第3節で触れた「現在の状態」に関して、「現在の状態」=「心理的損傷」が「多少なりともあり」と回答した者と「全くなし」と回答した者との間で、「PTSD症状あり・なし」に有意な差があるかどうかを見るために行ったクロス集計及びそれに伴うカイ2乗検定の結果表である。

表に見られるとおり、「心理的損傷あり」においては「PTSD症状あり」が多く(93.4%)「PTSD症状なし」が少ない(75.8%)。反面、「心理的損傷なし」においては「PTSD症状なし」が多く(24.2%)「PTSD症状あり」が少ない(6.6%)。

しかも、この関係は、正確有意率  $P=0.000 < \text{有意水準 } \alpha=0.05$  で統計的に有意であった。

「現在の状態」の大部分の項目は、ヴァン・デア・コークの「複合型PTSD」における「自己

認識に関する障害」、及びジュディス・ハーマンの「複雑性 PTSD」における「自己感覚変化」に対応するものであり、元々「複雑性（複合型）PTSD」の下位症状をなすものであるから、以上の集計・検定結果は十分予想されたものであるが、ここで、改めて、「現在の状態」と「過去および／または現在の PTSD 症状」との間に統計的に有意な関連があることが確認されたと言える。そして、この両者の有意な関連は、むしろ、「現在の状態」＝「心理的損傷」が「過去および／または現在の PTSD 症状」の前提をなし、後者は前者から帰結されたものであることを示すものと解釈できよう。すなわち、性的被害経験が「現在の状態」（＝心理的損傷）を生み出し、これが PTSD 諸症状を生み出した、という因果の連関を想定することができるのである（「過去および／または現在」という場合の特に「過去の PTSD 症状」に関しては、「現在の状態」が過去の時点でも「現在の状態」であり、過去において「過去の PTSD 症状」を産出しながら、現在に至るまで遷延し、回答時点での「現在の状態」でもありつづけている、という事態を想定できよう。）

表17 PTSD 症状の有無（全体）と心理的損傷の有無との関係<sup>a</sup>

|                    |                  |                  | 心理的損傷の有無  |               | 合 計    |
|--------------------|------------------|------------------|-----------|---------------|--------|
|                    |                  |                  | 心理的損傷全くなし | 心理的損傷多少なりともあり |        |
| PTSD 症状の有無<br>(全体) | PTSD 症状なし        | 度数               | 24        | 75            | 99     |
|                    |                  | PTSD 症状の有無(全体)の% | 24.2%     | 75.8%         | 100.0% |
|                    |                  | 心理的損傷の有無の%       | 34.3%     | 10.3%         | 12.4%  |
|                    |                  | 調整済み残差           | 5.8       | -5.8          |        |
|                    | PTSD 症状あり        | 度数               | 46        | 653           | 699    |
|                    |                  | PTSD 症状の有無(全体)の% | 6.6%      | 93.4%         | 100.0% |
| 心理的損傷の有無の%         |                  | 65.7%            | 89.7%     | 87.6%         |        |
|                    | 調整済み残差           | -5.8             | 5.8       |               |        |
| 合 計                | 度数               | 70               | 728       | 798           |        |
|                    | PTSD 症状の有無(全体)の% | 8.8%             | 91.2%     | 100.0%        |        |
|                    | 心理的損傷の有無の%       | 100.0%           | 100.0%    | 100.0%        |        |

a. :  $\chi^2$  値=33.802 正確有意確率=0.000  $p < .05$

以上の分析によって、性的被害経験は、心理的損傷を経由して、3つの主成分＝症状特性（総合的特性）にインパクトを与え、それらに負荷を持つ21の PTSD 症状、及びその総体としての複雑性（複合型）PTSD を生み出す、という因果連関が示唆された。ここで性的被害経験の結果生み出されることが社会統計学的に確認された各 PTSD 症状及び複雑性（複合型）PTSD は、心理的損傷の場合と同様に、被害者自身によって被害経験との関連が必ずしも意識的に把握されておらず、多くの場合、客観的にのみ把握されるものであることから、「客観的トラウマ変数」として捉えるのが適切である。

## 6. 回答者自身の「否定的」生活経験

### 6-1. 「否定的」生活経験の諸項目と経験率 [表18]

ダイアナ・ラッセルがサンフランシスコ・コミュニティ調査において性的虐待の長期的影響として生じる可能性のあることを検証した「否定的」生活経験 (negative life experiences) [Russell 1986: 200-203] の諸項目について追調査を行った（ここで「否定的」という言葉は、ラッセルの用語法に従ったままで、評価的意味を含まない一括弧付きで「否定的」と表記しているのは、このことを表明するためである。たとえば、離婚や未婚の母を否定的に意味づける発想は全く含まない。ただし、ドメスティック・バイオレンスについてはおのずから「否定的」の含意が付与されることになろう）。

「否定的」生活経験の調査諸項目とそれぞれの経験「あり」の比率は次のようになっている（括弧内は有効％。なお、「夫・パートナーを持ったことはない」「結婚の経験はない」などの付加的選択肢がある場合は、それへの回答を除外した合計値を基数として％が算出されている）。

- ①「夫・パートナーから、おどしや暴力によって、意に反して性的な行為を強要されたことがある」（12.2%）。
- ②「夫・パートナーから身体的暴力を受けたことがある」（16.8%）。
- ③「18歳以下で出産した」（0.3%）。
- ④「結婚の経験はないが、子どもを産んだことはある」（1.1%）。
- ⑤「別居あるいは離婚の経験がある」（11.5%）。
- ⑥「現在、非常に経済的に困っている」（9.9%）。
- ⑦「自分の母親より、条件の悪い職業についている」（6.7%）。
- ⑧「自分の母親より、低い教育歴しか持たない（持てそうにない）」（3.2%）。

なお、表18に、以上の8項目にわたる「否定的」生活経験が「1つ以上ある＝1つでもある」者と「1つもない＝全くない」者との実数及び比率が示されている。見られるとおり、前者257人、32.4%、後者535人、67.6%であった。

表18 「否定的」生活経験の有無（全体）

|     |                  | 度数  | パーセント | 有効パーセント | 累積パーセント |
|-----|------------------|-----|-------|---------|---------|
| 有 効 | 「否定的」生活経験が1つもない  | 535 | 66.0  | 67.6    | 67.6    |
|     | 「否定的」生活経験が1つ以上ある | 257 | 31.7  | 32.4    | 100.0   |
|     | 合 計              | 792 | 97.7  | 100.0   |         |
| 欠損値 | システム欠損値          | 19  | 2.3   |         |         |
| 合 計 |                  | 811 | 100.0 |         |         |

## 6-2. 性的被害経験が「否定的」生活経験に及ぼす影響－カイ2乗検定－〔表19〕

表19は、性的被害経験の有無と「否定的」生活経験の有無との関係を見るためのクロス集計及びカイ2乗検定の結果表である。見られるとおり、「被害経験が1つ以上ある」者においては、「否

表19 被害経験の有無と「否定的」生活経験の有無との関係

|         |                |                | 「否定的」生活経験の有無    |                  | 合 計    |
|---------|----------------|----------------|-----------------|------------------|--------|
|         |                |                | 「否定的」生活経験が1つもない | 「否定的」生活経験が1つ以上ある |        |
| 被害経験の有無 | 被害経験が1つもない     | 度数             | 131             | 33               | 164    |
|         |                | 期待度数           | 110.8           | 53.2             | 164.0  |
|         |                | 被害経験の有無の％      | 79.9%           | 20.1%            | 100.0% |
|         |                | 「否定的」生活経験の有無の％ | 24.5%           | 12.8%            | 20.7%  |
|         |                | 調整済み残差         | 3.8             | -3.8             |        |
|         | 被害経験が1つ以上ある    | 度数             | 404             | 224              | 628    |
|         |                | 期待度数           | 424.2           | 203.8            | 628.0  |
|         |                | 被害経験の有無の％      | 64.3%           | 35.7%            | 100.0% |
|         |                | 「否定的」生活経験の有無の％ | 75.5%           | 87.2%            | 79.3%  |
|         |                | 調整済み残差         | -3.8            | 3.8              |        |
| 合 計     | 度数             | 535            | 257             | 792              |        |
|         | 期待度数           | 535.0          | 257.0           | 792.0            |        |
|         | 被害経験の有無の％      | 67.6%          | 32.4%           | 100.0%           |        |
|         | 「否定的」生活経験の有無の％ | 100.0%         | 100.0%          | 100.0%           |        |

： $\chi^2$  値=14.339 正確有意確率=0.000  $p < .05$

定的]生活経験が1つ以上ある」が多く(87.2%),「[否定的]生活経験が1つもない」が少ない(75.5%)。反面、「被害経験が1つもない」者においては、「[否定的]生活経験が1つもない」が多く(24.5%),「[否定的]生活経験が1つ以上ある」が少ない(12.8%)。

この関係は、正確有意確率  $P=0.000 < \text{有意水準 } \alpha=0.05$  で、統計的に有意であった。つまり、性的被害経験を持つ者において「[否定的]生活経験あり」が有意に多いことが実証されたわけであり、そして、このことは、「否定的]生活経験が、性的被害経験の長期的影響の結果として生じた側面を強く持っていることを表している、と解釈できよう。端的に言えば、性的被害経験が「否定的]生活経験の創出に有意な影響を及ぼしていることが検証されたと言える。

### 6-3. 「否定的]生活経験と「現在の状態」=心理的損傷との関係-T検定-[表20~表20-1]

8項目にあたる「否定的]生活経験を得点化して、第3節で取り上げた回答者自身の「現在の状態」=心理的損傷が「多少なりともある」グループと「全くない」グループとの間で、それによって得られた「否定的]生活経験得点の母平均に差があるかどうかを見るためにT検定を行った。検定結果は、表20及び表20-1に見られるとおり、有意確率  $P=0.000 < \text{有意水準 } \alpha=0.05$  で、「多少なりともある」グループにおいて「否定的]生活経験得点の母平均は有意に高いとなり、性的被害の結果「心理的損傷」を持つことが、「否定的]生活を増殖させる効果を持つことが示唆された。

表20 心理的損傷の有無間での「否定的]生活経験得点の母平均の差の検定  
—独立サンプルのT検定—

|             | 等分散性のための Levene の検定 | 2つの母平均の差の検定 |      |        |         |          |        |        |           |         |
|-------------|---------------------|-------------|------|--------|---------|----------|--------|--------|-----------|---------|
|             |                     | F値          | 有意確率 | t値     | 自由度     | 有意確率(両側) | 平均値の差  | 差の標準誤差 | 差の95%信頼区間 |         |
|             |                     |             |      |        |         |          |        |        | 下限        | 上限      |
| 「否定的]生活経験得点 | 等分散を仮定する。           | 27.068      | .000 | -2.843 | 787     | .005     | -.3258 | .11462 | -.55085   | -.10084 |
|             | 等分散を仮定しない。          |             |      | -4.180 | 105.562 | .000     | -.3258 | .07794 | -.48039   | -.17130 |

表20-1 グループ統計量

| 心理的損傷の有無    |               | N   | 平均値   | 標準偏差   | 平均値の標準誤差 |
|-------------|---------------|-----|-------|--------|----------|
| 「決定的]生活経験得点 | 心理的損傷全くなし     | 69  | .2464 | .57919 | .06973   |
|             | 心理的損傷多少なりともあり | 720 | .5722 | .93476 | .03484   |

### 6-4. 「否定的]生活経験と PTSD 症状との関係-T検定-[表21~表21-1]

表21 PTSD 症状の有無間での「否定的]生活経験得点の母平均の差の検定  
—独立サンプルのT検定—

|             | 等分散性のための Levene の検定 | 2つの母平均の差の検定 |      |        |        |          |        |        |           |        |
|-------------|---------------------|-------------|------|--------|--------|----------|--------|--------|-----------|--------|
|             |                     | F値          | 有意確率 | t値     | 自由度    | 有意確率(両側) | 平均値の差  | 差の標準誤差 | 差の95%信頼区間 |        |
|             |                     |             |      |        |        |          |        |        | 下限        | 上限     |
| 「否定的]生活経験得点 | 等分散を仮定する。           | 27.410      | .000 | -2.904 | 787    | .004     | -.2858 | .09844 | -.47908   | -.0926 |
|             | 等分散を仮定しない。          |             |      | -3.914 | 166.55 | .000     | -.2858 | .07303 | -.43004   | -.1417 |



表21-1 グループ統計量

|             | 過去・現在における<br>PTSDの有無(全体) | N   | 平均値   | 標準偏差   | 平均値の<br>標準誤差 |
|-------------|--------------------------|-----|-------|--------|--------------|
| 「否定的」生活経験得点 | PTSD 症状全くなし              | 98  | .2959 | .62934 | .06357       |
|             | PTSD 症状多少なりともあり          | 691 | .5818 | .94496 | .03595       |

第5節で取り上げた PTSD 諸症状が過去・現在において「多少なりともある」グループと「全くない」グループとの間で、前項と同じく、「否定的」生活経験得点の母平均に差があるかどうかを見るためにT検定を行った。検定結果は、表21及び表21-1に見られるとおり、有意確率  $P=0.000 < \text{有意水準 } \alpha=0.05$  で、「多少なりともある」グループにおいて「否定的」生活経験得点の母平均は有意に高いとなった。これによって、性的被害の結果(5-3の知見を参酌すると、「心理的損傷」を経由して) PTSD 諸症状を持つことが、「否定的」生活を生み出し増殖させる方向で影響を持つことが示唆された、と言える。

以上の分析によって、性的被害経験は、心理的損傷、PTSD 症状を経由して、「否定的」生活を創出し増殖させる作用を持つことが暗示された。心理的損傷及び PTSD 症状が、「客観的トラウマ変数」として捉えるのが適切な変数であることは既に述べたが、この「否定的」生活経験は、被害者自身による被害経験との意識的関連づけの一層困難な、それゆえ客観的にしか関連づけのできない場合のより多い、その意味で典型的な「客観的トラウマ変数」として位置付けられるべきものである。

## 7. 性的被害経験の影響をめぐる諸変数間の因果関連モデル

ここで、以上の統計分析によって有意であることが検証された諸変数間の関係についての知見をまとめておく。ただし、関係における影響の向き(作用方向)については、仮説モデル[石川1998:32]で設定された変数間の独立・従属の関係に従う。

- ① デモグラフィック要因と被害の有無との関連：[カイ2乗検定] (1)回答者の現在の年齢、(2)現在の配偶者との同居状況、(3)現在の母親との同居状況、(4)回答者が育った地域=環境、(5)回答者が勤め人である場合の雇用形態と被害経験の有無との関連。
- ② 性的被害経験が「現在の状態」(=心理的損傷)に及ぼす影響：[T検定] 被害有無間での「現在の状態」の12得点全て及び合計得点の母平均の差の有意性。「主成分分析・T検定」被害有無間での、抽出された2つの主成分「非性的心理的損傷」・「性的心理的損傷」両方共の主成分得点の母平均の差の有意性；性的被害経験が、2つの主成分=2つの総合的特性を介して、12項目全て及び総体としての「現在の状態」に及ぼす影響。
- ③ 性的被害の特性要因-加害者のタイプ：加害者は家族・親族かそれ以外か、被害の頻度、加害者のタイプ：複数の加害者かそれ以外か、被害継続期間-が主観的トラウマ変数に及ぼす影響[重回帰分析]。
- ④ 性的被害経験が PTSD 症状に及ぼす影響：[T検定] 被害有無間での「PTSD 症状」の21得点全て及び合計得点の母平均の差の有意性。「主成分分析・T検定」被害有無間での、抽出された4つのうちの3つの主成分「他者・自己との関係障害」・「被害場面/加害者との関係の侵入的・強迫的な再体験化傾向」・「自己破壊行動傾向」の主成分得点の母平均の差の有意性；性的被害経験が、3つの主成分=3つの総合的特性を介して、それらに負荷をもつ21症状全て及び総体としての複雑性(複合型) PTSD 自体に及ぼす影響。
- ⑤ 「現在の状態」(=心理的損傷)が PTSD 症状に及ぼす影響：[カイ2乗検定] 「現在の状態」(=心理的損傷)の有無と PTSD 症状の有無との有意な正の関連。
- ⑥ 性的被害経験が「否定的」生活経験に及ぼす影響：[カイ2乗検定] 性的被害の有無と「否定

的」生活経験の有無との有意な正の関連。

- ⑦「現在の状態」(＝心理的損傷)が「否定的」生活経験に及ぼす影響：[T検定]「現在の状態」(＝心理的損傷)の有無間での「否定的」生活経験得点の母平均の差の有意性。
- ⑧PTSD症状が「否定的」生活経験に及ぼす影響：[T検定]PTSD症状の有無間での「否定的」生活経験得点の母平均の差の有意性。

以前に別の所で提示した仮説モデル [石川 1998：32] を前提に、以上の①～⑧の経験的諸命題に基づいて、諸変数間の因果関係(影響関係)を説明モデルにまとめると、図1ようになる。

本分析で取り上げた諸変数の範囲で、性的被害の発生に関与する変数は、現在及びそれに近い時期にリスク年齢にあったこと(現代化)と、回答者が育った地域が団地・住宅地域であることとの2変数である。後者については、コミュニティの監視機能の不全による外的抑止力の低下に関わる事柄であるが、これは、前者の現代化の中身の1つをなす事象と見ることもできよう。

受けた性的被害経験は、心理的損傷、PTSD症状を生成しながら、それらを經由して「否定的」生活を創生する。この被害経験→心理的損傷→PTSD症状→「否定的」生活、が性的被害の影響のメイン・ルートをなす。

この場合、心理的損傷については2つの主成分「非性的心理的損傷」・「性的心理的損傷」を介して、PTSD症状については3つの主成分「他者・自己との関係障害」・「被害場面/加害者との関係の侵襲的・強迫的な再体験化傾向」・「自己破壊行動傾向」を介して、それらに負荷を持つ心理的損傷、PTSDそれぞれの構成要素(諸状態、諸症状)－及びその全体－にインパクトが及ぶ、と解される。

なお、心理的損傷、PTSD症状、「否定的」生活の3つは、被害者自身によって被害経験との関連が必ずしも意識的・自覚的に把握されておらず、多くの場合客観的にのみその関連づけが可能であるという意味において、「客観的トラウマ変数」をなす。

一方、性的被害の特性要因をなす、家族・親族による被害、頻回の被害、複数の加害者による被害、長期継続の被害は、主観的トラウマを生成し深化させる。動揺感と影響感から構成される「主観的トラウマ変数」は、残存する心の動揺と影響感からくる心的萎縮とが心理的損傷、PTSD症状、「否定的」生活を強化する方向に作用する反面、被害とその結果との意識的関連付けを内包することにおいて、被害の影響からの脱却への意欲を刺激し、客観的トラウマ克服の契機ともなりうるという意味で、積極的な意味を持ちうる。

なお、性的被害経験の影響による、同居配偶者の不在、母親との同居癒着、不安定な雇用形態は、予めモデルに組み込まれた変数ではなかったが、それぞれ「否定的」生活経験の要素をなす(すなわち、この3つのそれぞれをa、「否定的」生活経験を集合Aとした場合、 $a \in A$ の関係が成り立つ)、あるいは、これら3つは「否定的」生活経験の部分集合をなす(すなわち、この3つからなる集合をa、「否定的」生活経験を集合Aとした場合、 $a \subseteq A$ の関係が成り立つ)、と考えるのが妥当である。

図1の説明モデルを、簡略化して、併せて新しい変数も付加して、因果関係(影響関係)がより鮮明になるように描き直すと、図2のようになるであろう。

図2に示されているように、PTSD症状と「否定的」生活経験とは合わせて性的被害の長期的影響として捉えることができるであろう(場合によっては、心理的損傷を長期的影響に含めることもできよう)\*。性的被害経験がこの長期的影響を発症・創生するのを防ぐには、専門家の治療的介入等々によって図2の因果の鎖をどこかで断ち切ることが必要である。性的被害を受けても心理的損傷が生じないように、心理的損傷が生じても長期的影響が生じないように、矢印の方向への進行をくい止めることが肝要である。

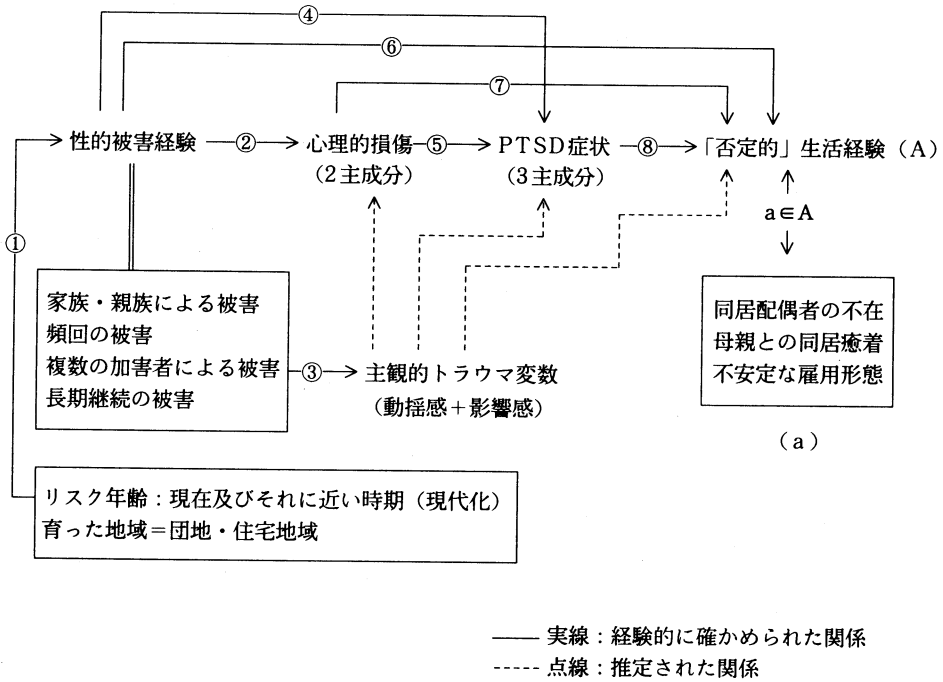
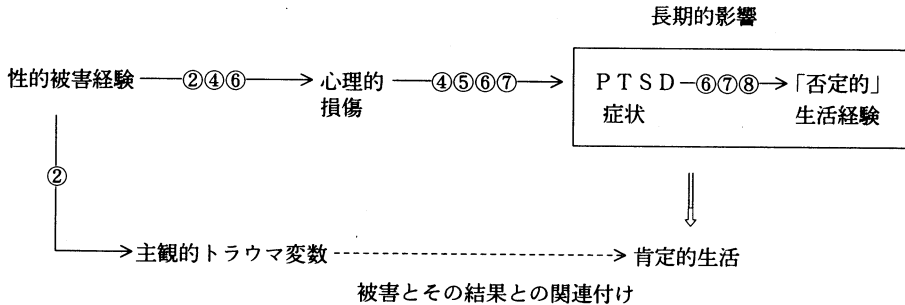


図2 諸変数間の因果関連の説明モデル(II)



なお、長期的影響が生じてしまった場合でも、これを克服して肯定的生活へと転換することは可能であるが、この場合、前述のとおり、被害とその結果との関連付けの意識化を随伴する主観的トラウマ変数が鍵的な役割を演じるであろう [石川 2002:232]。

\*PTSD症状と「否定的」生活経験とを合わせて「広義の『否定的』生活経験」、この中に含まれる「否定的」生活経験を「狭義の『否定的』生活経験」と呼称することも可能である。

[付記]

1. 本稿で分析した関西コミュニティ調査への参加者は、筆者以外では、村本邦子、窪田容子、西順子、前村よう子(以上、女性ライフサイクル研究所)、前田真比子(大阪大学大学院)、横野まゆみ(京都教育大学大学院)、新理恵(大阪市立大学大学院)である。なお、本調査の実施過程で、島根大学法文学部社会システム学科人間と社会コースの学生の協力を得た。
2. 本稿は、関西社会学会第53回大会(2002.5.25, 京都光華女子大学)において提出したペーパーを加筆修正したものである。

- 石川義之, 1998, 「インセスト的虐待のトラウマ (II)」『社会システム論集』2: 1-40.
- 石川義之, 2000, 「女性が受けた性的被害—大阪コミュニティ調査の統計分析—」社会システム論集, 5: 1-23.
- 石川義之・村本邦子・前村よう子・西順子・前田真比子・窪田容子, 2001, 『性的虐待の被害者についての調査研究; 女性が受けた性的被害—大阪コミュニティ調査から—』(平成10~12年度科学研究費補助金研究成果報告書) 女性のトラウマを考える会.
- 石川義之, 2001, 「性的被害とその影響—大阪コミュニティ調査の統計分析—」『アディクションと家族』第18巻1号: 69-77.
- 石川義之, 2002, 『社会学とその周辺—パーソナル理論から児童虐待まで—』大学教育出版.
- 斎藤学, 1997, 「トラウマ理論とアダルト・チルドレン」『現代のエスプリ』358: 22-55.
- 日本性教育協会, 1999, 『第36回日本=性研究会議・プログラム; 5』日本性教育協会.
- 日本性教育協会, 2000, 『青少年の性行動—わが国の中学生・高校生・大学生に関する第5回調査報告—; 8』日本性教育協会.
- 村本邦子, 2001, 「性的被害とその影響—大阪コミュニティ調査のインタビュー分析—」『アディクションと家族』第18巻1号: 230-236.
- Herman, Judith L., 1992, *Trauma and Recovery*, New York: Harper Collins. (=1996, 中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房.)
- Russell, Diana E. H., 1986, *The Secret Trauma: Incest in the Lives of Girls and Women*, New York: Basic Books.
- van der Kolk, B. A. & Fisler, R. E., 1994, "Childhood Abuse and Neglect and Loss of Self-regulation," *Bulletin of the Mininger Clinic*, 58(2): 145-168.

# Sexual Victimization and Trauma: The Statistical Analyses of Kansai Community Survey

*Yoshiyuki Ishikawa*

**Abstract:** We made a random sampling survey of sexual victimization on women in Kansai community in 1999-2000. The significant correlations among variables found by statistical analyses of the survey data are: ①the correlation between sexual victimization and five demographic factors (respondents' present age, present living or not with their husband, present living or not with their mother, characters of areas where respondents have grown up, present employment conditions of respondents), ②the correlation between sexual victimization and psychological toll (=objective trauma variable), ③the correlation between the frequency of occurrence of sexual victimization or the types of perpetrator or the period of duration of sexual victimization and subjective trauma variable, ④the correlation between sexual victimization and the symptoms of PTSD (=objective trauma variable), ⑤the correlation between psychological toll and the symptoms of PTSD, ⑥the correlation between sexual victimization and "negative" life experiences (=objective trauma variable), ⑦the correlation between psychological toll and "negative" life experiences, and ⑧the correlation between the symptoms of PTSD and "negative" life experiences. The main route of flow of influence abstracted from the above correlations is: sexual victimization → psychological toll → symptoms of PTSD → "negative" life experiences. This influence relationship suggests that professionals' and the others' therapeutical and welfare interventions at preceding stages are necessary for the prevention of victims' suffering from PTSD and their falling into "negative" life.

**Keywords:** Sexual Victimization, Sexual Abuse, Incest, Traum, PTSD